

福島医大会津医療センター開所から5年

会津若松市にある福島医大会津医療センターは十一日、開所から五年を迎えた。(二〇一七(平成二十九)年度の診療収入は約六十億円になる見込みで、統合前の県立会津総合、県立喜多方病院の合計額と比べて倍増するなど課題の病院経営は着実に改善していく。べき地医療支援も進む。今後は人口減少に対応した医療体制の構築に力を入れる。

【グラフ】の通り。医療センターの診療収入は統合初年度の二〇一三年度の四十二億一千万円から年々増加している。二〇一七年度の内訳は入院診療が約四十億円、外来診療が約二十億円となる見込み。会津総合、喜多方

○九年度に二十八億五千万円にまで落ち込んでおり、当時と比較すると三十億円以上も増えた計算になる。

収入増の要因について、医療センターは医師の充実を挙げる。専門医師数は統合前に両病院合わせて二十人程

※ 福島医療大会津総合センター 経営が悪化して、いた県立会津総合病院と県立喜多方病院を統合して2013年(平成25)年5月11日に開所した。会津地方の中核施設として高度な専門医療を提供するとともに、へき地支援、医工連携による地域産業の振興などに取り組む。25の診療科があり、一般病床は193床を有する。

病院経営着実に改善



人口減少対策の必
要性を語る棟方氏

人口減対策に力

度だったが、研修医を含めて七十人近くになつた。福島医大の付属病院に位置付けられたため、医師は診療の現場にいながら研究や教育に打ち込める。医療機器も近代化され、先端医療に身を置きたい

一般病床の稼働率は統合前の約60%に対し、二〇一七年度は85%に上昇した。専門性の高い治療に対応できる医師が多くなったことで来院者が増え、入院期間の短縮にもつながる。

医師が集まつた。

がっているという。医療センターは教育、研究、へき地支援、医師の増加は、へき地に大幅に圧縮される見通しだ。

副センター長兼付属病院長

棟方充氏に聞く

りの検討を急ぐ考え方示した。

も会津地域だけで治療を完結できる医療圏に
なった

会津地域で治療完結

とは全国に誇れる水準となった。漢方診療や感染症対応なども特化した取り組みとして注目を集める。会津若松市内の総合病院と担当分野をすみ分けし、それぞれが医療水準を向上させた。中通りなどに行かなくて

要とする患者はある。病院経営を安定させるためには今以上に効率性が求められる。循環器・呼吸器・消化器などをまとめた総合内科なども重要視されるだろう。これらに対応できる人材の育成に取り組みたい」

福島医大会津医療センターの棟方充副センター長兼付属病院長は、福島民報社の取材に対し、「血液や循環器系の疾患、整形、難聴の再手術、内視鏡技術などに、会津地方の人口減少に対応した態勢づくり」を実現するため、会津地方の人口減少に取り組むことを述べた。

よう見てゐるか。

も会津地域だけで治療を完結できる医療圏になつた

などの政策医療による
支出が多く、二〇一七
年度も十五億円程度の
赤字を計上するにみら
れる。ただ、統合前の
約四十億円の赤字に比
べると大幅に圧縮され
る見通しだ。

医師の増加は、へき
会津若松医師会の加
てている。

地支援にも大きな効果
をもたらしている。統
合直前の会津総合病院
は一年間に延べ二百四
十三人を派遣していた
が、二〇一七年度は三
千九十八人と十三倍に
なった。

藤道議長は「医療セ
ンターの医師が会津
各地の支援に回り、医
師不足の声をほとん
ど聞かなくなつた。病
院間の連携も強化さ
れ、地域医療の充実に
つながっている」とし